

# 平安京右京四条三坊三町跡発掘調査広報発表資料

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

2021年6月15日

所在地:京都市右京区西院春日町3－1(京都市立西院小学校内)

調査期間:2020年12月14日～2021年6月30日(予定)

調査面積:約1,153㎡(1区:408㎡、2区:660㎡、3区:85㎡、現在3区調査中)

## 1. はじめに

今回の調査は、京都市立西院小学校の新校舎建設工事に先立って行われているものです。調査は、3ヶ所の調査区に分けて行う計画ですが、1区調査は2月に終了し、現在2・3区を調査中です。今回は、2区の調査成果を中心に説明します。

## 2. 調査地周辺の歴史

調査地は、平安京右京四条三坊三町にあたり、東側には南北方向の街路である道祖大路(幅24m)が通っていました。調査地の道祖大路を挟んで東側の平安京右京四条二坊十一町～十四町には、淳和天皇の離宮である淳和院がありました。その後、平安時代中期の終わりごろには、藤原氏の荘園である「小泉庄」の一部になります。鎌倉時代中期に成立したとされる『拾芥抄』西京図によると、その範囲は右京四条二坊～四坊、同五条一坊～四坊、同六条二坊～四坊内に飛び地の状況ではありますが、総計62町を占める広大な荘園であったことがわかります。

## 3. 調査成果

### (1)平安時代中期

**道祖大路と道祖川** 川962は、平安時代中期ごろ道祖大路の路面部分に掘削された幅1.1m以上、深さ0.4m以上の水路です。これまでの調査と合わせて川幅は約14m、深さ1.8mであったと考えられます。溝900は、道祖大路の西側溝で、幅5.4m・深さ約0.3mです。出土遺物から10世紀後半に埋没したことがわかります。道路1100は、溝900と道祖川の間にあり、幅約4.4mです。平安時代後期の溝により路面の多くは失われたため土手状に残存しました。

### (2)平安時代後期から鎌倉時代前半

**掘立柱建物群** 900基以上の柱穴を検出し、少なくとも2棟以上の掘立柱建物が存在します。建物は、溝900が埋没した後にその上面に建てられます。建物1は、東西8.5m×南北7.5m(64㎡)、建物2は東西14m×南北11m(154㎡)いずれも比較的規模の大きな建物です。2棟の建物は南北に整然と並んでいたことから計画的に建てられたこと、柱穴が同じ位置に繰り返し掘られていることから、建物が同じような規模と配置で建てられたことがわかります。建物群の存続期間は11世紀末から13世紀の前半と考えられます。

**区画溝(溝150・351・945)** 東西方向の溝351(幅2.5m・深さ0.3～0.7m)、南北方向の溝150(幅1.5m・深さ0.5m)・溝945はL字型に曲がる一連の区画溝で、溝945は溝150の掘り直しとみられます。出土遺物から13世紀に埋没したことがわかりました。総柱建物あるいは耕作地を区画する溝と考えられます。

**井戸1037** 直径約1mの井戸です。上半部は石組み、下半部は木組みで11世紀末の土器や下駄などが出土しました。

## 4. まとめ

平安京造営当初、右京には京外の鷹峯に源流をもつ紙屋川を平安京内に取り込むための基幹排水路として西堀川

が掘削されますが、西堀川が10世紀代に埋没するため、その代替施設として道祖川が掘削されます。道祖川については、これまでの調査でその東肩部が確認されていましたが、今回西肩部が検出できたことで、西堀川に代わり、基幹排水路となった道祖川の変遷と構造が明らかになりました。

また、今回の発掘調査で見つかった計画的に配置された建物群は、「小泉庄」に関連するものと考えられ、荘園の管理施設であった可能性があります。今回の調査では、道路から川への変化、都城の宅地から荘園(耕作地)への変化など、平安京右京の変容を如実に物語る成果を得ることができました。

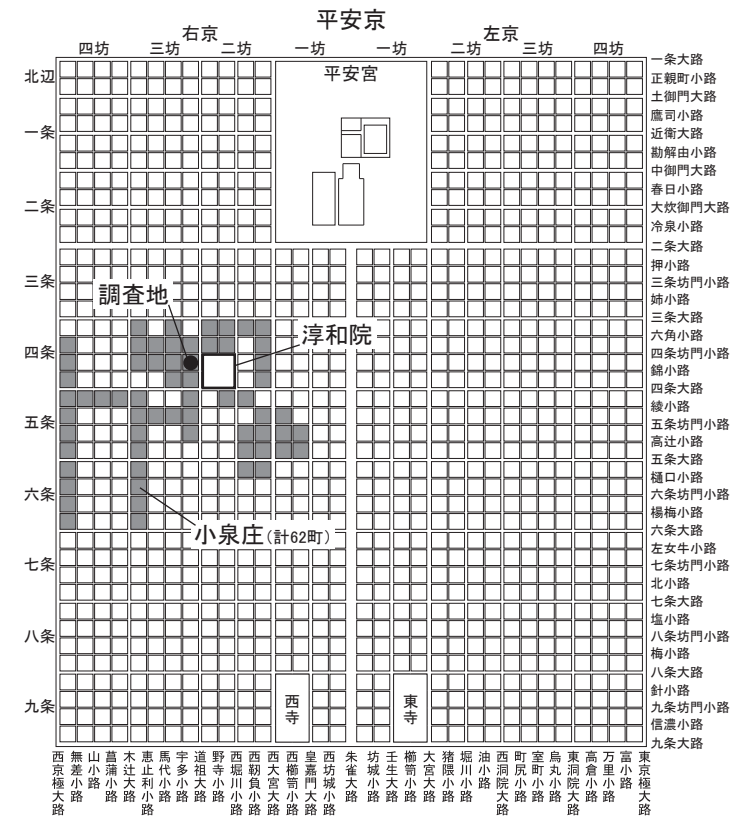


図1 平安条坊図と調査地

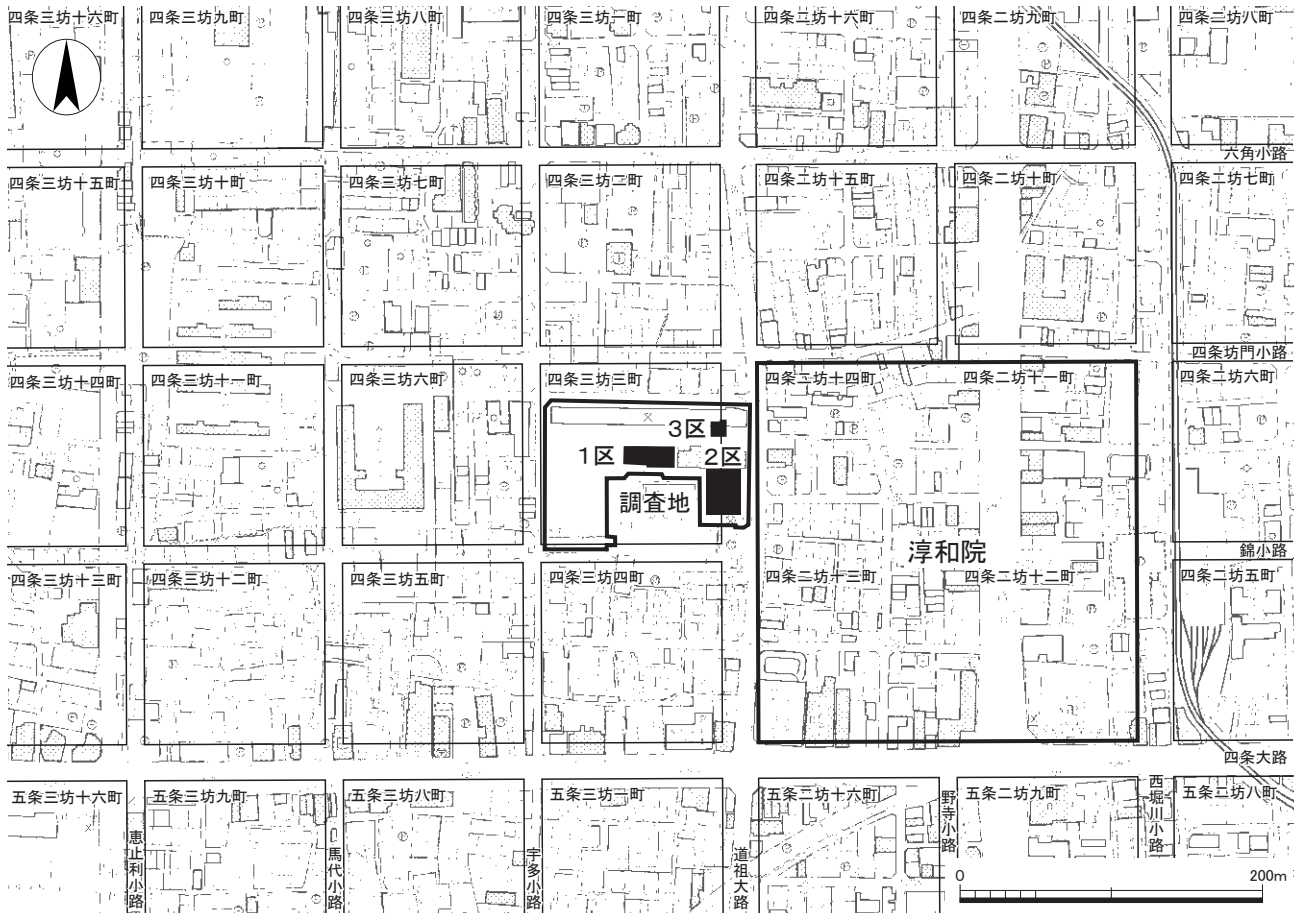


図2 調査地点位置図 (1 : 5,000)



図3 2区平面図 (1 : 150)

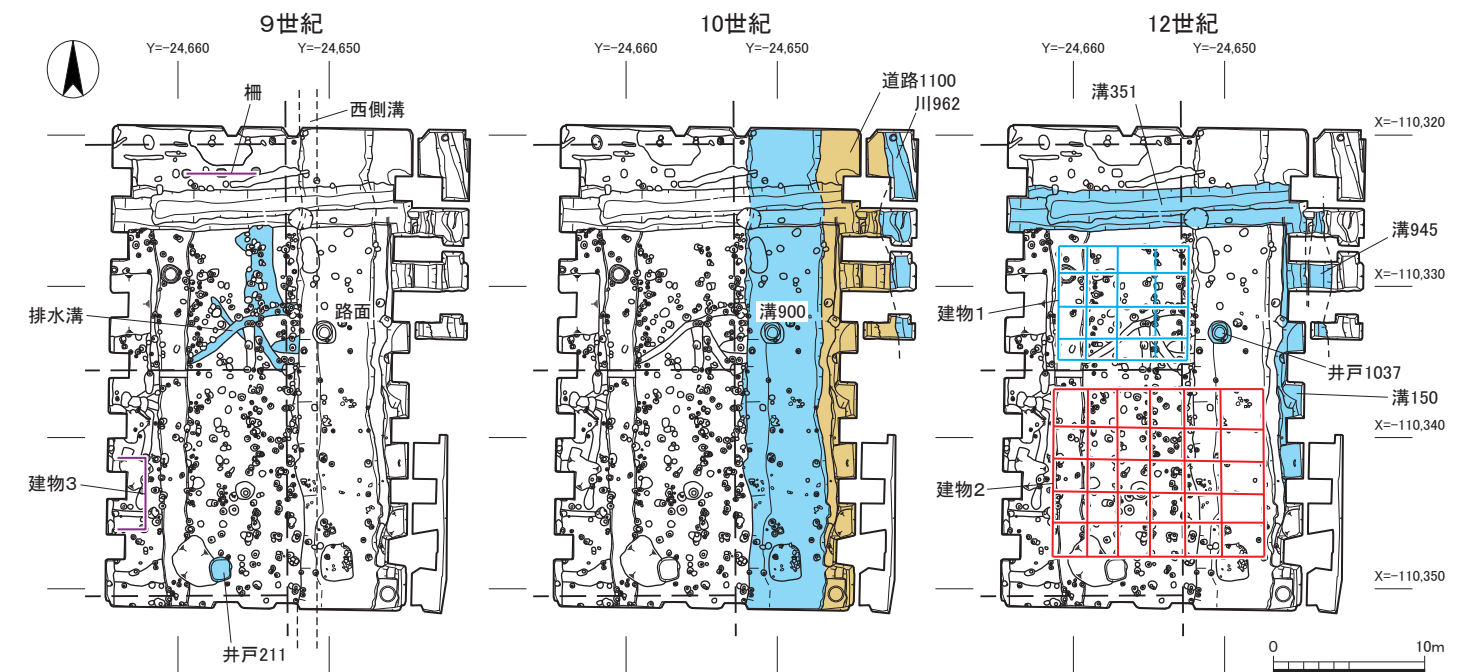


図4 変遷図 (1 : 500)



図5 建物3(平安時代前期)



図6 柵(平安時代前期)



図7 排水溝(平安時代前期)

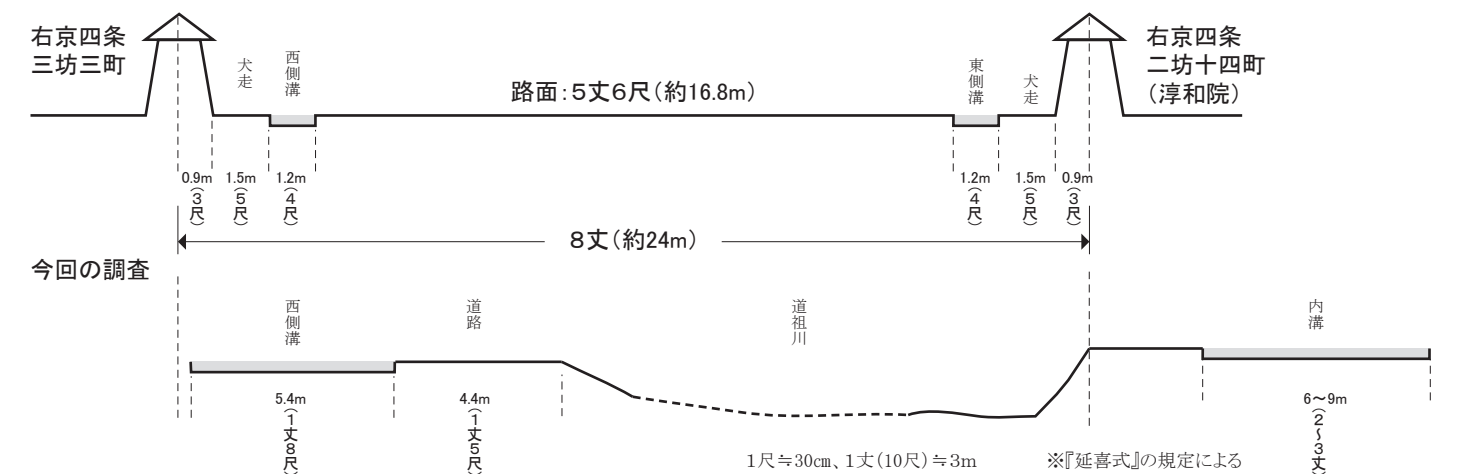


図8 道祖大路・道祖川の断面模式図(1:200)